

新たな事例検討会議システム導入による教師の専門性向上の検証

—SMAP を用いた特別な配慮が必要な児童生徒の理解・支援促進を目指して—

三浦巧也¹⁾ 竹達健顕¹⁾ 日下虎太郎²⁾ 久保田奈美³⁾

¹⁾ 東京農工大学 ²⁾ 明治学院大学 ³⁾ 新宿区立余町小学校

<要 旨>

本研究は、特別な配慮が必要な児童生徒への支援における教師の専門性向上を目的として、新たな事例検討会議手法「SMAP (Solution-Focused Meeting with Anticipation Dialogue and Person-Centered Approach)」を開発し、その有効性を検証したものである。現代の学校現場では、教師の業務多忙やメンタルヘルスの悪化により、事例検討会議の実施が困難であるとともに、児童生徒に対する適切な理解と支援を行うための専門的な手法が求められている。SMAP は、解決志向・未来志向・教師中心のアプローチを基盤に、支援者が安心して発言し、チームとして協働的に支援策を検討できる枠組みを提供する。本研究では、5つのプロジェクト(A～E)を通じてSMAPの導入・評価を行った。プロジェクトAでは100名の教師を対象にSMAPの評価と教師効力感の関連を調査し、6割以上が有効と評価し、効力感との有意な相関も確認された。プロジェクトB～Dでは、実際の学校現場にSMAPを導入し、肯定的な意見や児童の行動改善といった実践的成果が得られた。また、プロジェクトEでは海外の日本人学校においても、SMAPの有用性が認識された。総合的に、SMAPは教師の専門性を支える有効な手法であり、導入にあたっては教職員間の共通理解と児童の実態把握が鍵となる。今後は継続的導入による長期的効果の検証が求められる。

<キーワード> 特別な配慮が必要な児童生徒 事例検討会 支援方法 専門性向上

【はじめに】

本研究は、教師を対象として学校現場で運用可能な事例検討会の実施手法であるSMAP (Solution-Focused Meeting with Anticipation Dialogue and Person-Centered Approach)を開発し、その効果を検証することを目的とする。そして、教師が特別な配慮が必要な児童生徒の理解と支援に関するより高度な専門性の獲得を目指し、この介入の社会実装を果たす(図1)。

教師の業務は例年負担を強いられており、様々な特別な配慮が必要な児童生徒の理解を深め、か



図1. SMAPを用いたチーム会議の有効性の検証

つ適切な支援を行うために、例えば、事例検討会議等を行うことが難しい実態がある。加えて、多忙であるがゆえに教師自身のメンタルヘルスが低下し、精神疾患を引き起こすリスクが高まっている。加えて、年々、離職率も増えている。

一方で、特別な配慮が必要な児童生徒に対する専門的な支援方法や技法が強く求められていることも先行研究で明らかとなっている（鹿嶋、石黒、吉本、2022）。教師が限られた時間で、より効率の良い機会を経て、特別な配慮が必要な児童生徒の理解と支援に関する高度な専門性を獲得することが喫緊の課題である。

そこで、本研究において、事例検討会（以下、チーム会議と呼称する）を円滑に進めるための実施手法である SMAP を開発する。SMAP を用いたチーム会議が教師の業務負担を軽減し、かつ、特別な配慮が必要な児童生徒のよりよい理解と適切な支援の確立に功を奏す手法であることを、実証的に検証する。具体的には、以下のプロジェクト A から E を行った。

【SMAP の解説動画および模擬動画について】

本研究で開発する SMAP について、「S」は「Solution-Focused」であり、解決志向に基づく児童生徒の本来持っている力を資源として捉え、よりよい学校適応に向けた支援方法を生み出す技法である。「M」は「Meeting」であり、チーム一丸となって取り組む会議形式を意味する。「A」は「Anticipation Dialogue」であり、児童生徒の未来像を描き、事例提供者の教師を支え周囲の支援者同士が肯定的な意見を語り合う技法である。

「P」は「Person-Centered Approach」であり、事例提供者の教師を中心に、周囲の教師や専門家が話題を提供する教師の労をねぎらい、否定され

ることなく当該児童生徒のよりよい理解と支援方法を暖かい雰囲気のもとで主体的に生み出すことを大切にするアプローチである。また、SMAP を主体的に実装するため、図 2 の手順を参考にチーム会議が実装される。

なお、本研究を実装するため、SMAP に関する解説動画（https://youtu.be/2Dg_bCFlwRU）と模擬動画（https://youtu.be/OXp_VHFICYs）を作成した（図 3）。以下のプロジェクトにおいても、解説動画や模擬動画等を用いて行った。

SMAPをいかしたチーム会議の流れ

(1) 会議のルールの説明 (1分) :

- ・事例を報告してくださる先生の日ごろの労をねぎらいます
- ・決して否定や批判をすることなく、明日からの支援に自信をもって臨んでもらえるよう、あたたかい気持ちで応援します。
- ・解決志向による支援方針を立てていきます。
- ・より具体的な行動レベルで考えることを念頭におきます。
- ・会議で知り得た情報については集団守秘義務の対象になります。

(2) 事例紹介 (5分) :

- ・今一番困っていることを話してもらいます。

(3) 資源集め (9分) :

- ・対象児童が既に出来ていることや、もともと持っている力を収集していきます。



(4) 未来の姿 (4分) :

- ・担任が対象児童に、どのような状態（姿）になって欲しいのかを確認します。

(5) 具体的な対応策 (10分) :

- ・変化を起こすための案をできるだけたくさん出します。
- ・いままでにやったことのないこと、考えたこともなかったこと、思いもよらないことなど、どんどん意見を出し合います。
- ・具体的にやってみようと思うものを担任が選び、実際の支援策を確認します。

(6) 振り返り (1分) :

- ・報告者とメンバーから、会議について感想を発表します。
- ・次回の日程を決めます。

図2.SMAPを用いたチーム会議の実施手順



解説編



模擬会議編

図3. SMAPの解説と模擬会議の動画QRコード

【プロジェクトA：SMAPの有効性と教師効力感との関連性に関する調査】

実施時期：

2025 年 4 月に実施した。

対象：

小学校教諭 30 名、通級による指導および特別支援学級（固定級）担当教師 30 名、特別支援学校教師 30 名、小学校養護教諭 10 名、合計 100 名を対象とした。

実施方法：

SMAP に関する説明資料および模擬事例検討の動画を視聴してもらい、SMAP の有効性についてアンケート調査を行った。加えて、中嶋・久坂（2018）の教師効力感尺度を援用し、「特別な配慮が必要な子どもの個別のニーズに対応するように学習課題を計画する自信がある」「特別な配慮が必要な子どもに支援・指導したことについて、彼らの理解度を適切に評価することができる」「特別な配慮が必要な子どもの行動を落ち着かせたり、コントロールすることができる」「特別な配慮が必要な子どもの支援計画を立案するにあたって、保護者や他の専門家と連携を図ることができる」「特別な配慮が必要な子どもの支援に関する内容や実態等、特別支援教育について知らない人たちに情報を提供する自信がある」という 5 項目を独自に作成し、5 件法でたずねた（とても当てはまる～全く当てはまらない）。

分析方法：

SMAP の評価については、5 件法でたずねた割合（％）を算出した。また、特別な配慮が必要な児童生徒への支援に関する教師効力感尺度については、信頼性係数を算出した。次に、特別な配慮が必要な児童生徒への支援に関する教師効力感と SMAP の評価について相関分析を行った。

そして、平均値をもとに、特別な配慮が必要な児童生徒への支援に関する教師効力感の高低群と、SMAP の評価項目である「SMAP を実施することが難しい」の得点における高低群を組み合わせ、4 群を作成した。作成した 4 つの群として、SMAP の感想（自由記述）をテキストマイニングの一種である共起ネットワーク分析によって、SMAP の課題の特徴を捉えることとした。

倫理的配慮：

本研究は、「国立大学法人東京農工大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会要項」に則り、「東京農工大学研究倫理委員会」の了承を得て実施した（承認番号 240204-0693）。なお、対象の教員には、個人情報等の保護について説明をし、書面にて同意を得て実施した。

結果：

（1）SMAP の評価

SMAP について、「とても当てはまる」「当てはまる」と肯定的に評価した教師は、「SMAP は理解できた」は 81%、「SMAP は有効な手法だと思った」は 65%、「SMAP を使ってみたいと思った」は 58%、「SMAP を使って会議ができると思った」は 60%であり、約 6 割の教師が肯定的な評価であることが示された。

（2）特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感尺度

特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感尺度 5 項目について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数は、固有値の減衰パターン（3.38、0.56、0.45・・・）、および因子の解釈の可能性を考慮して 1 因子とした。次に、回転後の因子パターンを表に示した。なお、回答項目の整合性を確認するため、クロン

バックのアルファ係数を計算した。その結果、アルファ係数は 0.88 であった。これは、尺度を構成する項目が比較的高い内的一貫性を持っていることが示唆された。

(3) 特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感と SMAP の評価との関連性

特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感と SMAP の評価との関連を把握するため、Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感と「SMAP は理解できた」との間には、有意な正の相関がみられた ($r(98)=0.34, p<0.001$)。次に、「SMAP は有効な手法だと思った」との間には、有意な正の相関がみられた ($r(98)=0.24, p<0.018$)。次に、「SMAP を使ってみてみたいと思った」との間には、有意な正の相関がみられた ($r(98)=0.20, p<0.045$)。次に、「SMAP を使って会議ができるといった」との間には、有意な正の相関がみられた ($r(98)=0.25, p<0.013$)。次に、「SMAP を使って会議をするのは難しいと思った」との間には、有意な正の相関がみられなかった ($r(98)=-0.62, p<0.542$)。

(4) SMAP の課題

「SMAP を使って会議をするのは難しいと思った」の平均値以上の得点群 (4 から 5 点) を「課題高群 (H 群)」(63 名、63%) とし、平均値以下の得点群 (1 から 3 点) を「課題低群 (L 群)」(37 名、37%) と名付けた。また、特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感の平均値以上を「効力高群 (H 群)」(48 名、48%) とし、平均値以下を「効力低群 (L 群)」(52 名、52%) と名付けた。

次に、課題低群と効力高群を LH 群 (22 名、22%)、課題低群と効力低群を LL 群 (15 名、15%)、課題高群と効力高群を HH 群 (26 名、26%)、課題高群と効力低群を HL 群 (37 名、37%) とした。その後、SMAP に感ずる感想 (自由記述) について、KH Coder 3 (樋口、2020) を用いた共起ネットワーク分析を行った。

手順として、語の最小出現数を 2 に設定し、共起関係数 50 の設定で絞り込んだ。共起ネットワーク図は、語同士の Jaccard 係数を算出し、線として描画された。なお、KWIC コンコーダンス画面を開き、例外的な記述がないこと、共起した語同士は同様の文脈で用いられていることを確認しながら解釈を行った。

LH 群の特徴として、「前向きな話し合い」「先生同士の支え合い」「実施可能」が抽出された。HH 群の特徴として、「よい手法」「担任を責めない」「実際に行ってみないと分からない」「ポジティブな意見交換」「分かりやすい」が抽出された。LL 群の特徴として、「SMAP の必要性を広める」「大変参考になった」「参加者の認識」「動画による理解促進」が抽出された。HL 群の特徴として、「SMAP の共通認識」「児童の実態把握」「学校全体での取り組み」「自分ひとりでは難しい」が抽出された。

【プロジェクト B：小学校教員事例研修における SMAP の導入】

実施時期：

2024 年 8 月に実施した。

対象：

東京都内の公立小学校教師 33 名を対象とした。

実施方法：

単一事例に対して 4 から 5 人が 1 グループとな

り、SMAP を用いた児童理解と支援方法について検討を行った。研修会終了後に SMAP の有効性についてアンケート調査を行った。

倫理的配慮：

本研究は、管理職および教職員より、個人情報等の保護について説明をし、書面にて同意を得て実施した。

結果：

11 名からの回答を得た（33%）。SMAP の有効性について「SMAP は理解できた」「SMAP は有効な手法だと思った」「SMAP を使ってみたいと思った」「SMAP を使って会議ができると思った」について、「とても当てはまる」「当てはまる」と肯定的に評価した教師は 11 名（100%）であった。

SMAP が支援会議で生かせる点について自由記述で質問したところ、「一人の人を責めずに、いろいろな意見が出るので支援の可能性が広がると思った。」「子ども自身の持つ力を引き出す指導を考えることができるようになる。」「短い時間で校内委員会が実施できる。事前の準備が少ない。提案者にとってプラスになる。」といった意見を得た。

【プロジェクト C：単一事例における継続型 SMAP の導入】

実施時期：

2024 年 5 月から 7 月に実施した。

対象：

東京都内の私立小学校の管理職 1 名、教師 1 名（担任）、スクールカウンセラー 1 名を対象とした。実施方法：

単一事例に対して継続的に SMAP を用いて児童理解と支援方法について検討を行った（月 1 回程度、合計 3 回）。チーム会議終了後に SMAP の

有効性についてアンケート調査を行った。

倫理的配慮：

本研究は、管理職および教職員より、個人情報等の保護について説明をし、書面にて同意を得て実施した。

結果：

SMAP の有効性について「会議ではあたたかい言葉が相互に交わされた」「会議では孤立することなくチームとしての一体感を感じた」「会議では安心して発言することができた」「会議では具体的な支援策を考えることができた」「会議では問題の原因を追究するよりも、よりよい解決方法を考えるきっかけになった」について、「とても当てはまる」「当てはまる」と肯定的に評価した教師は 3 名（100%）であった。

チーム会議で出された支援策による児童の変化について自由記述で質問したところ、「現状をチーム会議で話した際、様々なアプローチで支援策を考えて下さり、ちょっとしたことでも私自身がやってみようかな、と思えるようなことができました。そして、「ちょっとしたこと」から試してみると、児童がその都度意欲的に取り組んでくれて、スモールステップで高めていく方向性を示しいただき、助かりました。」「学級全体でポジティブな言葉かけを交し合う空気を作る支援策を講じたことと、当該児童本人の状態改善により、学級の中で当該児が目立つ行動が少なくなった。加えて、他児の言葉かけがマイルドになっていったことで当該児童の落ち着きと、学級全体の落ち着きが見られるようになったと考えられる。」との意見を得た。

【プロジェクト D：通級による指導における SMAP の導入】

実施時期：

2024 年 12 月に実施した。

対象：

東京都内の公立小学校の管理職 1 名、通級による指導担当（特別支援教室）教師 5 名を対象とした。

実施方法：

単一事例に対して SMAP を用いて児童理解と支援方法について検討を行った。会議終了後に SMAP の有効性についてアンケート調査を行った。

倫理的配慮：

本研究は、管理職および教職員より、個人情報等の保護について説明をし、書面にて同意を得て実施した。

結果：

3 名からの回答を得た（50%）。SMAP の有効性について「SMAP は理解できた」「SMAP は有効な手法だと思った」「SMAP を使ってみたいと思った」「SMAP を使って会議ができると思った」について、「とても当てはまる」「当てはまる」と肯定的に評価した教師は 3 名（100%）であった。

SMAP が支援会議で生かせる点について自由記述で質問したところ、「担任が安心して話せる会議はとても有意義だと感じました。原因追究で傷ついたり、子供のせいにしたりすることなく前向きに会議を進められる点。」「建設的な意見、具体的な手立てが出ること。」といった意見を得た。

【プロジェクト E：ハノイ日本人学校における SMAP の有効性に関する調査】**実施時期：**

2025 年 2 月に実施した。

対象：

ベトナムハノイ日本人学校教諭（小学校）32 名を対象とした。

実施方法：

SMAP に関する説明資料および模擬事例検討の動画を視聴してもらい、SMAP の有効性についてアンケート調査を行った。

倫理的配慮：

本研究は、管理職および教職員より、個人情報等の保護について説明をし、口頭にて同意を得て実施した。

結果：

ハノイ日本人学校に勤務する教師 1 名が代表者として、配布した資料に関するコメントとして「大変貴重な会議手法であり、日本とは環境や子どもが抱くストレス等が異なる地域で実施することができると考える」といった意見を得た。

【総考察】

本研究において、プロジェクト A から E の結果を踏まえ、SMAP の有効性を検証することができた。SMAP の有効性については、調査協力者の約 6 割の教師が肯定的な評価を示したことが明らかとなった。

また、特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感と肯定的な SAMP の評価には、関連性が示された。

加えて、特別な配慮が必要な子どもへ支援に関する教師効力感が低い群において、「学校の全教職員が SMAP について共通認識を持つことが期待され、その必要性についても学校組織として促進していく」ことが課題として抽出された。また、SMAP を円滑に実装するには、「児童の実態把握も丁寧に行うことが求められる」という課題も抽出された。

このことから、実際の学校現場では、SMAP を導入する前に、教職員が SMAP の目的や解決志向的かつ未来志向的なアプローチに基づく支援のあり方を共通認識することが、より効果的な実装となると推察された。加えて、当該児童の情報についても、SMAP の実施前により効率よく共通理解する方法が期待される。

さらに、SMAP によって、特別な配慮が必要な児童生徒へ支援に関する教師効力感が向上する可能性が示唆された。SMAP の中長期的な実装が、教師効力感に及ぼす影響（専門性の向上）について、今後検証することが期待されると推察した。

【文献】

樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版．ナカニシヤ出版．

鹿嶋真弓・石黒康夫・吉本恭子（編）（2022）30分で会議が終わる！職員室に変化を起こすブリーフミーティング．学事出版．

中嶋彩華・久坂哲也（2018）小学校教員の教師効力感と教員経験年数の関連の予備的検討．日本教育工学会論文誌，42，57-60．

【謝辞】

本研究に関わってくださった、全ての教職員の皆様に対して、心よりお礼申し上げます。